キズナエピソード

環はなび　5話

//ヴィジュアルノベル形式開始

//背景：黒

俺の目の前で、はなびが補導されてしまった。

俺は何もすることができなかった。

なぜ、あのとき動くことができなかったのだろう。

思い出すたび、胸の奥が締め付けられた。

//次ページ

数日の間、俺は立ち直ることができなかった。

立ち直ることができた理由は単純だ、

――はなびから連絡が来たのだ。

//ヴィジュアルノベル形式終了

//ADV形式開始

//カフェ店内

［はなび］

「あぁ、とびお。こっちこっち」

［とびお］

呼び出されたカフェに行くと、

左頬を赤く腫らしたはなびが気だるそうに手招いていた。

［とびお］

始めの一声をどう掛ければ良いか迷いつつ、

俺は向かい側に腰を下ろす。

［とびお］

「えっと……大丈夫、じゃないよな？」

［はなび］

「ははっ、心配してくれたのか？」

［とびお］

「当たり前だろ！

賭博罪って、50万以下の罰金なんだってな。

いくらだったんだ？　俺も払う！」

［はなび］

「勉強熱心だね、アンタは。

じゃあ、常習賭博罪については調べた？

常習として賭博をしたものは、3年以下の懲役だ」

［とびお］

「え……懲役……」

［はなび］

「心配するなって。

現に私は今、ここにいる」

［とびお］

「それじゃあ、やっぱり罰金……？」

［はなび］

「……言ってなかったけど、私の父は警察官僚でね。

あの一件は治めてもらったよ。

ははっ……」

［とびお］

何でもないように装っているけれど、

はなびの声に力はなく、

今にも消えてしまいそうだった。

［はなび］

「……どうやら、私と私の太客を売るために

後輩が警察にタレコんだらしい。」

［はなび］

「けっこう面倒見てやってたつもりだったんだけどな……

まあ、大金が絡めばこんなことも起きて当然か。」

［はなび］

「アンタも巻き込んで悪かったね。

金全部持っていかれたし。

……ごめん」

［とびお］

「そいつは朗報だよ。

ようやく俺は大金から解放されたんだな。

肩の荷が下りたよ」

［はなび］

「ふふっ。とびお、アンタならそう言うと思ってた」

［とびお］

俺の一言で、ようやくはなびが元気を取り戻す。

そうだ。しんみりしているのは、彼女らしくない。

［とびお］

「ところで、その顔どうしたんだよ？　虫歯か？」

［はなび］

「そんなわけ無いだろ。

……親父にひっぱたかれた」

［とびお］

「お前の親父さん、容赦ねぇな。

でもまぁ、それくらいですんでよかったか」

［はなび］

「あぁ、そうだな。

せっかくだし、お前も一回叩かれてみるか？」

［とびお］

まるでいたずらっ子のように、はなびは笑った。

そのまま机に突っ伏すと、上目遣いに俺を見る。

［はなび］

「親父への反抗だったんだよ」

［とびお］

そしてだるそうな姿勢のまま、

はなびはポツポツと言葉を紡ぎはじめた。

//ADV形式終了

//ヴィジュアルノベル開始

「前にも似たようなことをやらかした時があってさ、

　その時もちょっとした警察沙汰になって――。

　今回みたいに、親父の権力に守られたんだ……」

//次ページ

「その時、親父は声もかけてくれなくかった。

　お袋はわんわん泣いてたけどさ。

　私は何も起こしてないみたいに扱われた。

　私がどんなに危険なことをしても、

　親父という安全圏の中で遊んでるだけ……。

　そう言われてるみたいで……ムカついた」

//次ページ

「だからかな。

　親父の安全圏から飛び出るような、

　もっと大く派手なことをするようになったんだ。

　私は私だ。親父の手中になんか収まらないぞ！　って

　反抗してやりたかったのかも」

//次ページ

「……でも、話はもっと単純で、

親父にかまってもらいたかっただけなのかもしれない。

今回ひっぱたかれて、なんか気づいちゃったよ」

はなびの声音はどこか自嘲気味だった。

けれどすぐに体を起こすと、吹っ切れたような笑顔を浮かべる。

//ヴィジュアルノベル形式終了

//ADV形式開始

［はなび］

「でもまぁ、そもそも好きなんだけどね。

スリルってやつが」

［とびお］

素直に笑うはなびを見て、俺はなんとなく感じた。

今まで見てきたはなびは、

いつも強がりという鎧を着ていたのかもしれない。

［とびお］

だから、今目の前にいる彼女こそが、

本当のはなびなんだ。

こんなに愛しいはなびを見たのは、初めてだった。

//ADV形式終了

//5話END